

医療過誤の現場から

8人の患者たちの叫びを聞け

医師のミスで患者が取り返しのつかない状態になったとする。そんな時、真摯に患者や家族に対応する医師は、ごくわずかだ。大抵は専門用語を駆使して言い逃れたり、ひどい者はカルテを改ざんしたりして証拠を消そうとする。そんな医師の非道に法廷闘争を挑む被害者たちが、増えてきた。患者日人の現実を追った。



出産事故 死亡

上長真知子さん(兵庫県・享年41歳)

陣痛が始まった上長真知子さんは、出産予定日の'89年11月5日、尼崎市内の産婦人科医院に入院した。第3子である長女・永奈ちゃんを出産したが、真知子さんは子宮破裂による大量出血で翌日早朝に死亡。夫の三郎さんは「帝王切開経験者で早産手術を施しているため、子宮破裂の危険性が高いにもかかわらず、当直医らがそれを防ぐ処置を怠ったのであり、止血処置も誤った」として'90年7月、提訴した。裁判で三郎さんは、カルテや

看護記録が改ざんされており、院長がゴルフから帰宅し病院へ駆けつけた時間など、被告らの証言が事実と異なり、隠ぺい工作があったと指摘。自らの調査もふまえて追及した。'96年7月、「被告は解決金を支払う義務がある」という実質勝訴で和解。現在、その産婦人科は京都府に移転しており、この和解について当時の院長は「和解内容は真実と異なるといまでも考えており、迷惑している。和解は弁護士が勝手にやったことで、私の意志ではない」と語っている。

↑真知子さんの墓参りにきた上長さん一家。永奈ちゃん(7歳)は無事生まれてきたが、9時間後、母親は帰らぬ人となった。永奈ちゃんは一度も母親に抱かれたことがない
→長男と次男を出産し、幸せだった頃の真知子さん



生後10カ月の事故で植物状態に
なってしまった

法載・二次使用禁



半田卓也君(群馬県・4歳)

'93年2月、半田卓也君は群馬県内の総合病院で生まれた。8ヵ月(29週)の早産で、1451gの「極小未熟児」だったが、脳波やCT検査で異常はなかった。しかし声門の一部が狭く自発呼吸ができない「声門下狭窄」だったので、気道を確保するために鼻から気管チューブを入れて呼吸を管理していた。母親の信子さんは「10ヵ月後の12月5日、卓也のチューブに痰が詰まり呼吸ができなくなり、医師が新しいチューブの挿管を試みたが、数度にわたって失敗。卓也は11分間も呼吸ができず、脳に酸素がいかないため心停止し、低酸素性脳症になり、植物状態になってしまった」という。'95年10月、両親は「気管チューブ内の痰を取り除くなどの管理や、速やかに挿管するための準備を怠った」として提訴。病院側は「何度も気管切開の手術を薦めたが拒否されたのが残念だ。挿管もスタンダードな方法で行っており、病院に落ち度はない」として現在係争中。

→低酸素性脳症で植物状態となり、現在も「新生児集中治療室(NICU)」で全面介護が必要な卓也君と母・信子さん

日本の医療水準は低い。医療過誤の情報公開が急務だ

島田康弘 名古屋大学教授

医療事故のうち、医師側に過失があったものを「医療過誤」と呼ぶ。その場合、患者側はもちろん真相究明を望むが、病院側が真実を明かすことはほとんどない。そして患者側がそれを知る術も極めて限られていると言っよい。なぜなら、ほとんどの医療が密室で行われ、数少ない記録であるカルテや看護日誌も改ざんさ

れる恐れが多分にあるからだ。そのために医療過誤はほとんどが闇から闇に葬られているのが現実なのである。

それでは、医療過誤は、なぜ起こるのだろうか。その原因として第一に挙げられるのが、「医師の技術が未熟」である場合だ。大学を卒業し国家試験で医師免許を取れば、誰でも医師として治療に当たることができる。ところが日本では、アメリカやイギリスなど欧米先進国と違い、大学で臨床体験をほとんどさせないため、医学部を卒業した時点での医療水準は、

先進国の中で非常に低い。また医師になって1〜2年目の研修医では、技術が未熟であり、当然事故も起こりやすくなる。

第二の原因として、「医療環境の不備」がある。設備や器具など十分な医療環境が整っていない場合だ。また、医師の「思い込み」「うっかりミス」などの「ヒューマン・エラー」もあり、医療過誤はこれらが複合して起こることが多い。

私が代表をつとめる「医療の安全に関する研究会」では、こうした医療過誤を防ぐための「ガイドライン」を作成して

いる。これは医療技術と環境の向上のために、あらゆる事故の可能性を詳細に考慮して、その対応策を網羅したマニュアルである。「脊椎麻酔」や、呼吸を確保する「挿管」のミスなどは、これまで何度も繰り返して起きてきた医療過誤であり、これらは事故の先例を学べば減らすことが可能なものである。そのために過誤を含めた医療事故は隠すべきではなく、欧米先進国のように事故を公表しなければならぬ。それをマニュアル化して再発を防ぐことが、いま求められているのだ。

【医療事故関連組織】

- 「医療過誤原告の会」
関東 東京都新宿区 ☎03-5323-5260
- 「医療事故情報センター」
愛知県名古屋市中区 ☎052-951-1731
- 「医療の安全に関する研究会」
愛知県名古屋市中区 ☎052-951-3931
- 「薬害・医療被害情報センター」
兵庫県神戸市 ☎078-577-2064
- 「陣痛促進剤による被害を考える会」
愛媛県新居浜市 ☎0897-46-4382



出産事故 重度障害

伊東昌美ちゃん(埼玉県・6歳)

'91年2月11日、大分県内で看護婦をしていた伊東祥子さんは、陣痛が始まったため、県内の公立病院に入院した。予定日を20日近く過ぎた「過期産」であり、陣痛が強く、吐き気、嘔吐、脱水症状が激しかったため、翌12日、帝王切開を希望。伊東さんによると、そのときに「人手がないので明日まで我慢しなさい」といわれ、待たされたという。「翌13日、胎児の心音が下がったので、看護婦が慌てて医師を呼び、帝王切開しました。しかし、昌美は泣き声も上げず、羊水を大量に飲んで重度の新生児仮死になっていました」(伊東さん)。昌美ちゃんは危篤状態から脱したものの、低酸素性脳症による脳性麻痺、てんかん、精神発達遅滞と診断される。伊東さんは「異常陣痛を放置したことが原因」として、'92年2月に提訴し、現在係争中。病院側は「医療過誤がなかったことは、裁判で明らかになるだろう」と語っている。



↑ 出産事故で低酸素性脳症になり、ただちに挿管され「NICU」へ入室した昌美ちゃん。胎便吸引症候群などの危篤状態がつづいた→重症障害児の保育施設にて母・祥子さんと。昌美ちゃんは首が座っておらず、手足も思うように動かせない。目も4年間見えなかった

帝王切開が遅れて新生児仮死



高熱患者を1ヵ月も放置した

診療不十分 死亡

伊東幸一さん(東京都・享年24歳)

'91年8月、ダウン症の伊東幸一さんは、都下の知的障害者の更生施設に一時入所した。幸子さんによると、「施設で高熱や下痢がつづいていたらしく、家族が知らない間に病院に通われ、最後は入院させられていた。通院しはじめてから1ヵ月近くたってから連絡があり、「急変したのですぐに来てくれ」といわれた。驚いて病院に駆けつけたときには死んでいた」という。死因は急性心不全で、入院後6日目のことだった。「病院は高熱や腹痛、嘔吐、下痢の症状が1ヵ月もつづいたのに病気の原因を究明しようともせず、適切な治療をしないまま放置していた。ダウン症だからコミュニケーションがとれなかったというが、患者の治療を怠る理由にならない。早く適切な専門医に見せていれば死ぬことはなかった。また入院したことや病状を家族に隠した施設もおかしい(幸子さん)。」'93年9月、病院と施設を相手に提訴し、現在係争中。

←「あの子は家族にも知らされず入院させられ、1ヵ月も苦しんでいたのに満足な治療も受けずに息を引き取ったんです」と母親の幸子さんは目頭を押さえた



↑入所していた施設でVサインを出す幸一さん。生前に撮られた最後の写真で、このとき病気だったかどうかは不明だが、この後、家族の誰とも会うことはできなかった

↓幸一さんが通っていた中野養護学校の正面玄関には、幸一さんが小学校5年のときに描いた絵がレリーフになって壁に埋め込まれている。幸子さんには貴重な思い出の絵だ



二次使用禁止

レントゲン診断 死亡

佐々木正人君(大阪府・享年17歳)

'94年1月、バイクに乗っていた佐々木正人君はトラックに接触し転倒。全身を強く打ち、救急車で救急病院に搬送され入院した。翌日、正人君は血を吐き腹部の激痛を訴えるが、レントゲン撮影の結果、担当医は「打撲以外に異常はない」と診断。しかし、腹部の激痛はつづき、入院後9日目、十二指腸に穴があいていることが判明。すぐに手術したが手遅れで、十二指腸腹膜破裂の合併症で死亡した。両親は「レントゲン写真に十二指腸破裂を表わす気腫像が写っているのにこれを見過ごし、9日間にわたって食事を与えたことで合併症を起こした」として、'94年4月、提訴。1年後、病院側との和解を薦める弁護士を「医師の責任を明確にしたい」として解任。その後は弁護士に頼らず、母親の孝子さんが医学書や法律書で勉強し、法廷で担当医師二人を尋問するなど、医療過誤の可能性を追及。'97年1月、病院側に過失があったことが認められ、一審で勝訴した。現在、控訴審中。

←「医師の責任を追及する」ため弁護士を解任し、自ら法廷に立って一審勝訴を勝ち取った父・佐々木謙蔵さんと母・孝子さん



「腸に穴があいているのを見過ごされ死亡」



↑正人君が交通事故に遭った直後に写された腹部のレントゲン写真。「左上方の黒い三日月形の部分に、医学部の教科書に出てくる見本のような「気腫像」があるんです。十二指腸の破裂でしが現れないもので、担当医師はこれを見逃してしまいました。このレントゲンが決め手になりました」と孝子さんはいう。高校2年、17歳で亡くなった正人君。バイクとギターが好きな優しい子だった



診断不十分 脳障害

佐藤真理さん(岩手県・33歳)

'89年11月、当時兵庫県に住んでいた佐藤真理さんは高熱がつづき、救急指定の総合病院に入院した。母親によると、「高熱が下がらず痙攣を起こすなどの症状がつづき、言動にも脳障害と思われる兆候があった。しかし、院長は腸チフス以外は考えられないといい、酸素吸入も、脳炎の治療もしなかった」という。その後当直医までが脳炎を疑うに至り、疑問を感じた両親は、4日目に転院させ、そこでの検査の結果「単純ヘルペス脳炎」と診断される。死亡率が高く、生存しても脳に障害が生じる重病で、一刻も早い手当てが必要だった。佐藤さんは生死の境をさまよい、治療の末どうにか一命は取りとめた。しかし、脳細胞が破壊され、新しい事柄を記憶できない「記憶力障害」になる。母親のせつ子さんは「最初の病院できちんと治療していれば、障害は残らなかったか、もっと軽いものだった。障害の原因は最初の医師の診断ミスにある」として'93年5月、提訴し、現在係争中。

→真理さんが通っている保育園で母・せつ子さん。「記憶力障害」は、過去の記憶はあるが、新しい記憶を脳に蓄積することができない脳の障害。理工系の真理さんは大学入試の微分・積分の問題は解けるが、買い物に出かけても道や買うものを忘れてしまう。そのため外出するときはいつもせつ子さんと一緒だ
↓保育園の作業所で木工の作業をする真理さん。リハビリも兼ねての仕事である



特発性食道破裂 死亡

藤本 拡さん(愛知県・享年50歳)

健康体だった藤本拡さんは、'93年12月4日、忘年会で飲酒後の夜半に、突然嘔吐し、痙攣のような胸部痛に襲われた。翌日の日曜、県内の大病院の救急外来を訪れ診察を受けた。急性肺炎の可能性があるといわれ、レントゲン撮影と血液検査を受けたがその疑いはなしとされ帰宅。しかし、夕方から痛みが増し、6日に同病院の内科へ。CT検査の結果、食道に穴が開いているのが見つかり、緊急手術した。妻の由紀子さんは執刀医に「成功とも不成功ともいえない。この病気は特発性食道破裂というもので、12時間以内の手術なら問題ないが、24時間以降だと救命率は非常に低い」といわれたという。藤本さんは2ヵ月後、敗血症により死亡。由紀子さんは「激しい痛みを訴えて日曜の朝に救急外来を訪れたのに、なぜ見過ごされ、精密検査もしなかったのか。もし発見できて、すぐ手術したら間に合ったかもしれない」として、提訴を準備中。担当の執刀医は「現在のところコメントできない」としている。

←亡夫の遺骨と最後になった旅行写真を前に「救急病院で胸の異常を見過ごされた」という無念の気持ちを訴える妻の由紀子さん

「すぐ手術すれば間に合ったのでは」



←発病1ヵ月前に富山県・立山へ家族旅行に行った拡さん。水泳が得意で大病を患ったことはなかったという



股関節手術 歩行障害

中島英明さん(東京都・51歳)

大学病院で理学療法科医長を務めていた中島英明さんは、'93年夏ごろ股関節に痛みを感じるようになった。かつて在籍していた同病院の整形外科で診察を受け、「関節ネズミ（剥がれた軟骨片が関節内で痛みを生じさせる）」と診断され、9月に手術。中島さんによると「術後、これまで痛くなかった部位に激痛が走ったので主治医に聞いたが問題があるとはいわれなかった。関節は治ったと思いリハビリを始めたが痛みがひどくなり、検査を受けると、股関節に新たな異常が見つかった」という。その原因を調べると、「手術時に関節を引っ張り過ぎたため異常が起きた可能性が高いことが判明。その場合、私が行ったりハビリは逆効果で、傷を悪化させる。病院は関節をひっぱり過ぎたことを告知すべきだった」（中島さん）。主治医に聞いても要領を得ず、中島さんは'96年6月、「手術ミスと告知義務違反のため悪化した」として提訴し、現在係争中。大学は「医療過誤はなかった。この問題ではいまだに各方面に異常な数の手紙を出しまくるなど、中島氏の個人的資質が事のこじれの背景にある」としている。



↑'87年当時、大学病院の整形外科医だった中島さん（写真右下）と、医局の同僚たち。中島さんは理学療法科へ異動の後、'96年、退職

二次使用禁

歩行障害になり、一時はまったく歩けなかったが、逆効果になるリハビリをやめて静養したら杖を使っておけるようになったという